

問一 二人で実際に逢っている時だけをいうのではなく、逢うことができずに相手のことを思つことや、もう終わってしまった恋を思いやってみること。

問二 昔の歌などに、桜は満開であるのを、また月は一点の曇りもないものを見たのよりも、花のもとでは(その花を散らす)風を嘆き、月の夜には(その月を隠す)雲を嫌い、あるいは花や月を待ったり、(花が散り月が雲に隠れるのを)惜しむ思いの限りを詠んだ歌が多く、趣深いのも、とりわけそのような歌に多いのは、誰もが桜は満開なのをのどかに見たいと思ひ、月は一点の曇りもないことを期待する心がきわめて強いからこそ、(なかなか)そうもいかないのを嘆いているのだろう。一体どここの歌に、花に風を待ち、月に雲を願っているものがあるだろうか、(いな、そんなものはない)。

問三 兼好法師の情趣は「人の本心に背いた、後世の小ざかしい考え」がつくり出した「つくりみやび」であるとする。人の心はつれい時の気持ちは深く意識されず、思い通りにいかない時に身にしみて意識されるものである。心になわなない嘆きや悲しみの歌が多いのはそのためである。だからといって、つらく悲しいことを、それが情趣だといって願ひ求めるようなのは、「人のまことの心」に反したいつわりにも過ぎないと批判している。(一九七字)

問四 満開の桜の花を私は美しいと思う。桜並木はもちろん、田畑の中に一本ぽつりと咲く桜、都会のビル街の桜もそれぞれが、それを見る人々の心に訴えかけてくるものをもっている。しかし「桜吹雪」という言葉もある。風に舞い散っていく桜の花を表したものだ。日本語の最も美しい言葉の一つとされている。私たちは満開の桜のほかに、それが散っていく姿にも心を動かされていく感性を作り上げ、磨き上げてきたのではないだろうか。桜が咲き、そして散りやがて花はなにも無くなってしまうという一連の動きの中に桜の花を見ていると思う。そのような感性は宣長のいう「つくりみやび」ではなく、むしろ精錬された日本人の心のよくな気がする。つぼみ 満開 散るといふ時間の流れの中に「桜の花の見どころ」があると私は考える。(二八四字)